

令和5年度 第1回豊南地域会議 会議録

■日 時 令和5年5月25日（木）午後6時30分～8時15分

■会 場 豊南交流館 1階 大会議室

■出席者 <委 員> 天野 昭一郎 伊藤 信行 大富 晃 岡田 剛
川上 正弘 貴堂 悦弘 小玉 知子 小戸 昌則
小林 俊一 柴田 省吾 杉原 弘康 鈴木 久雄
柘植 紀宏 中島 浩 福土 範行 良知 晶子
※欠席者 内田 昌利 山下 安則
<交流館> 田中 真澄（豊南交流館長）
<豊田市> 太田 稔彦（豊田市市長）
後藤 哲也（地域振興部 部長）
中川 さゆり（自治推進室 室長）
<事務局> 岡本 裕之（地域支援課 課長）
松下 誠（地域支援課 副課長）
塚田 征弘（地域支援課 担当長）
杉浦 由里江（地域支援課 主事）

■次 第

開 会

- 1 豊田市民の誓い唱和
- 2 令和5年度豊南地域会議について
- 3 記念撮影
- 4 市長あいさつ
- 5 提言の授受
- 6 提言内容説明
- 7 市長との意見交換会
- 8 事務連絡

閉 会

■議 事（要約）

・提言を受けた市長の感想

地域交通の課題を考えるにあたって、自治区単位で考えることが大切だと感じた。地域バスに関してはあまりにもエリアが広すぎて地域のニーズに合わないが、こういった2自治区の間取りは良いと思う。

区費の使い道をどう決めるかというのはとても難しいことだと思うが、一部の移動に困った人に対して区費を使っている、自治区の間取りとして行っているのは良いこ

とだと思う。

高度経済成長期あたりでは共助が当たり前に行われていたが、車を1人1台持つ時代となり、人に頼る・助け合うといったことが当たり前に行われなくなった。最近になって、少子高齢化が進み、昔の状況に戻っている。しかしその助け合うことが当たり前だという感覚は戻らないからこういった課題が出てくる。

市外の取組の例だが、大学生に地域の空き家に格安で入ってもらい、格安であるかわりに、ボランティアで地域のお助けをしてもらう、といった若者を巻き込んで地域の課題に対応している地域もある。

元気高齢者がどのように地域で活動するかというのもポイントだと考えている。

・市長との意見交換会

委員：今自治区の実施に関して補足だが、2年前にアンケートをとり、いくらまでなら区費から出してよいか、自治区内の共通認識として予算を決めた。

市長：わくわく事業にしなかったことがありがたい。区民が自分の支払った区費をこの取組のために使うことについて了承を得ている。移動支援に関するものは誰もがとおる道である。今は困ってなくてもいずれは我が身である、そういった意識をもって区費の使い道を決められているのはとても良いと思う。

委員：自分の自治区ではわくわく事業を使おうと思っていた。

市長：わくわく事業というのは市民が払った税金の使い道を地域が決めるというものである。ただ、移動支援という課題は特定の地域だけでなく全市的なものであるため、それぞれの地域でわくわく事業を使ったら予算がいくらあっても足りず大変なことになってしまう。

委員：地域会議委員を計8年やっている。地域会議委員以外にも日常的に地域活動をされている人は多い。そのため、この会議だけで地域の意見を集約することは難しい。会議の回数も増やしてもっと幅広い、関係する人を集めたら様々な意見を集約できるのではないかな。

市長：逆に地域会議を実行部隊にしてほしくないと思っている。地域が課題だと思っているが、自治区では担えないことを担うのが地域会議の役割だと思っている。むしろ気楽な感覚でやっていただきたい。

傍聴人：自治区の区長だが、今回の提言は「高齢者」に的を絞っている。個人的な意見だが、毎日子どもを見守りをしていて、会話をすることでとても元気が出る。高齢者の支援をするよりも、若者たちとふれあう機会を増やせば健康につながる。

委員：足が悪く家から出られない人もいる。現実的に考えて、その世代間交流まで届くのはもっと先だと思う。現状、困っている人に対して支援をするべき。

委員：元区長だが、自分の住む自治区は人数が少なく、規模の大きな自治区と同じような取組をしたくても予算がない。つまり、大きな自治区は取組ができる

が小さな自治区ではやれないという現状がある。

委員：そういう実情があるから自分の自治区と一緒に取り組むのはどうか、と提案した。

市長：名案だと思う。合併するということではなくいくつかの自治区が共働して取り組む等、いくらでもやりようがある。